

シンガポール滞在記

吉田国光*

摘要

本稿は筆者のサバティカル研修でのシンガポール滞在中を通じて得られた随想である。地理学的には重要視されながらも、専門的な研究論文では取り上げにくい「現場でえられた感覚」のいくつかを紹介した。また、これからサバティカル研修を考えている若手には筆者の「失敗談」を、海外エクスカージョンの訪問先としてシンガポールを考えている読者には候補地の紹介を副次的な目的とした。筆者の理解に基づいた見聞から「現場でえられた感覚」は偏ったものとなり、様々な異論を生み出すだろう。しかし、異論がでることはむしろ充実した地理情報の共有につながる。「現場でえられた感覚」のなかには研究のアイデア的なものが含まれていた。シンガポールは観光商品としてパッケージングされた印象の強い国であるが、地理学的な研究対象としてまだまだ「調理しがいのある素材」であろう。

キーワード：エクスカージョン、サバティカル、日常生活、ホーカー (Hawker)、コンド、シンガポール

I はじめに

筆者は2018年4月から2019年3月初旬の間に延べ約10か月弱、サバティカル研修でシンガポールに滞在した。本稿は筆者のシンガポール滞在中を通じて得られた随想である。地理学ではシンガポールを事例とし地誌的な内容を含めた研究は山下 (1988) をはじめ太田 (1998) などによって発表されてきた。そのほかにも各論的なものを含めれば、その後の動向も含めた研究や報告が発表されてきた (鋤塚, 1998; 2001; 杉本, 2017; 内藤, 1995; 中澤ほか, 2008, 中澤, 2012)。筆者の力量でサバティカル研修中の活動からシンガポールやその周辺国を対象とした研究を積み上げられなかった。そこで本稿は地理学的には重要視されながらも、専門的な研究論文では取り上げにくい「現場でえられた感覚」のいくつかを紹介する。

また、サバティカル研修は大学でテニユアポストを得ることの最大の魅力であるが、これからサバティカル研修を考えている若手には筆者の「失敗談」を、海外エクスカージョンの訪問先としてシンガポールを考えている読者への候補地の紹介を副次的な目的とする。

なおシンガポール滞在中を可能としたサバティカル研修のチャンスは前職の金沢大学人間社会研究域学校教育系に在職時にいただいたものである。金沢大学のサバティカル研修の制度は2014年度に開始されたが、各分野の教員は1人、多くて2人に減らされており、制度が設けられても

*立正大学地球環境科学部准教授 E-mail: ysh-9232@ris.ac.jp

おいそれとサバティカルを取れる状況ではなかった。他の国立大学でも似たような状況であろう。大学院で在籍していた筑波大学も同様であり「一生に一度でいいからサバティカルにいけたらいいな」というぐらいの気持ちであった。周囲の人間の厚意が制度と社会の仕組みの欠陥を補ってくれた典型例であり育児休業の取得と似ている。

II シンガポールへ渡航するまで

1. どうしてシンガポール？

筆者のフィールドは主に農山漁村である。サバティカルでの滞在先が「どうしてシンガポール？」という疑問を多くよせられた。理由は単純で「ツテがあった」ことと「長い新婚旅行」を考えていたためである。

「ツテ」は、2016年1月から3年間で始まった共同研究プロジェクト「Asian Smallholders: Transformation and Persistence」に Research collaborator として参加したことを契機としている。このプロジェクトはいわゆるシンガポールの科研であった。文化人類学者の Thompson, E 氏（シンガポール国立大、以下 NUS）が PI、地理学者の Rigg, J 氏（現ブリストル大）と Gillen, J 氏（現オークランド大）が Co-PI、インドネシア、カンボジア、タイ、ベトナム、マレーシア、ラオスの東南アジア各国と、台湾、韓国、日本の大学に所属する研究者が研究協力者となって、各国農村の Smallholder を比較するものであった。なお日本チームは、最初の窓口となった横山智氏（名古屋大）に庄子元氏（当時 PD、現岩手大）と筆者が加わって構成された。PI と Co-PI はそれぞれ2~3の国を担当し、各国の研究者と共同で、それぞれの国を対象とした事例研究を進めるといったものであった。このプロジェクトの目標は、2冊の本とメジャーなジャーナルで事例研究の特集を組むことであったが、まとまったものは1冊のみで（Thompson et. Al. eds 2019）、各チームがそれぞれ単発的にジャーナルに論文を載せることで一区切りとなった（庄子, 2019; Cole and Rigg 2019; Gillen et. al., 2019; Nguyen et. al. 2020; Shoji et. al. 2020）。

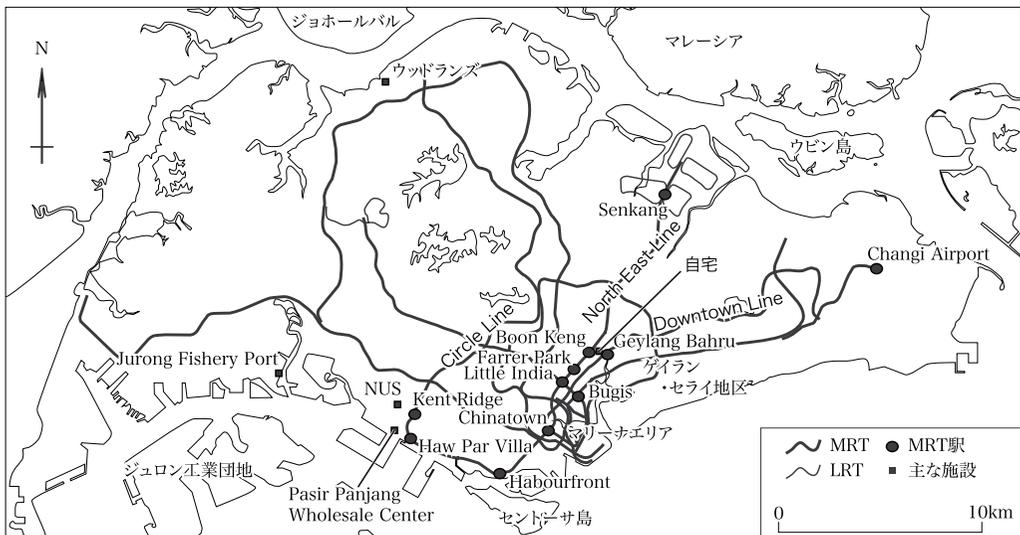
日本の担当は Thompson 氏で、彼とはいくつかの地域を回った。その道中、仙台でビール片手に牛タンを食べている時に、Thompson 氏から「Kuni（筆者）はなんで海外に行かないんだ？」と聞かれ、「チャンスがあったら行きたい。あと2~3年でサバティカルがとれるかもしれないから、その時は受入研究者になってくれる？」と応えて快諾してもらったことが全てである。またこのプロジェクトでは、参画する全ての研究協力者の揃うワークショップが3度開かれ、2018年のワークショップの時にカンボジアの Yi, Rosa 氏（プノンペン大）から「どうしてシンガポールでサバティカル？」と尋ねられ、「去年結婚したばかりだ」と応えたら、詳細は語らずとも腑に落ちたような顔をしていた。海外にもほとんど行ったことのない妻を、滞在に不安をおぼえるところへ連れ回すほどの度量は筆者にはない。なお、このプロジェクトは様々な国の研究者と「近い距離」で付き合うきっかけとなった。サバティカル取得にせよ、シンガポールでの受け入れにせよ、周囲の助けが全てで、筆者の研究者人生は周囲の方々に成り立っているのは間違い

ない。

2. 渡航準備

渡航に向けて様々な準備が必要となるが、その一つにビザの取得がある。通常、サバティカルで国外へ滞在する時には「学術ビザ」のようなものを利用することが多い。筆者も悠長に「学術ビザ」の申請を考えていたが、シンガポールで長期滞在するためには「労働ビザ」か「留学ビザ」の2種類しかなかった。「労働ビザ」はシンガポールに所在する法人から給料を得ていることを条件とするので、日本の大学から給料を得ている筆者は該当しなかった。「留学ビザ」はどこかの学校に入学する必要があり金銭的にも厳しかった。給料のほとんどをシンガポールでの家賃に充てなければならなかったためである。受け入れの Thompson 氏や Rigg 氏と調整するなかで勧められた Asian Research Institute, NUS の Grant への応募を検討したが、当時プロポーザルを突破するアイデアもなかった。また Grant をもらうことで発生するオブリゲーションも避けたかった。幸いにも 2016 年度から 3 つの科研に分担者として加えてもらったが、年間の 10% 以上も家を空ける学外任務で、科研の担当部分を全く進められていなかった。「たまったツケ」の返済がサバティカル期間の目的の一つであったため、ツケを上積みしたくなかったのだ。Thompson 氏と相談した結果、「日本のパスポートだったらビザ免除で 2~3 か月は滞在できるし、期間が迫ってきたら路線バスでジョホールバルへ一時出国して戻ってきたらいいよ。「NUS で研究している」というレターも出すし」という方法で落ち着いた。

とはいえ、こんな「いいかげんな方法」で押し通せる訳もなくチャンギ空港のパスポートコントロールで最初に妻が、次に筆者が止められた。妻が止められた時には、先に入国できた私が説明して入国できたが、外から鍵をかけられる小部屋で数十分待機させられた。私が止められた時



第1図 対象地域
(現地観察により作成)

には NUS の事務へ電話させられ説明してもらった。入国管理官は電話越しに「事情はわかるしルールとしては可能だけど望ましくない」と NUS の事務職員と目の前にいる筆者に強めに注意した。こうした事情から、第三国での滞在期間も必要となり「4月～翌3月の延べ約10か月弱」という不思議な滞在期間が生まれてしまった。他方、サバティカル期間中、講義系の科目を中心に3科目まで非常勤講師の予算は出してもらえたが、学類に地理学教員一人であり、卒論指導のために一時帰国も必要で「ちょうどよく」帰国のタイミングにできた。

Ⅲ シンガポールでの生活

1. 日常生活

シンガポールでの住居は、Airbnb を介して MRT の North East Line の Boon Keng 駅から徒歩5分にあるコンドのワンルーム物件を選択した(第2図 a)。Little India 駅の2駅隣である。家賃は約6畳で約20万円/月であった。コンドには2つのプール、ジャグジー、小さなジム、BBQスペース、テニスコート、小さな遊具が設置されていた。シンガポールの住宅はおおよそ戸建て住宅、コンド、HDB の3種類である。コンドはいわゆるマンションで、HDB はシンガポール政

a) 奥に滞在したコンド、手前右に HDB (2018年12月)



b) Boon Keng 駅前のホーカー (2018年12月)



c) 最も利用した食堂 (2019年2月)



d) NUS での研究スペース (2019年3月)



第2図 シンガポールでの生活の様子
(筆者撮影)

府の Housing & Development Board の提供するいわゆる公営団地である。先述の通り「いいかげんな方法」で滞在した筆者は HDB への入居は難しかった。大学にある宿舎もなかなかのお値段で、「長い新婚旅行」で半共同生活的な大学の宿舎はハードルの高いものであった。勤務先からサバティカルにかかる補助は往復の航空券（最大 20 万円）のみで「金で時間を買う」という気でコンドにした。後日談として帰国後、研究費で対応可能な部分もあったと判明したが後の祭りであった。

コンドの入居者は、分譲部分と賃貸、短期もしくは長期滞在者と様々であった。渡航当時、シンガポールでは 3 ヶ月未満の短期宿泊での民泊は禁じられており、11 か月の契約ながらも長期滞在のビザを持っていない筆者はグレーゾーンであった。物件のオーナーはジョホールバル在住者だった。よく貸してくれたものである。このコンドの入居者はシンガポールでマジョリティとなる華人系から南アジア系、マレー系といった永住者やバカンスの欧米系と多様であり、得体的もしれない日本人が「いいかげんな方法」で住んでいても気にならなかったのかもしれない。なお生来の貧乏性を発揮し、高い家賃の元を取ろうと週 1 回、ジムの利用とプールで水泳を利用するようになった。当初、ジムにあったランニングマシンを利用していましたが籠の中のハムスターのような気分になり、外でジョギングするようになった。おかげで日常生活の導線以外のエリアを見る機会になった。週 1 回のジョギングは帰国後も続く習慣となり、金沢市の車で走りにくいエリアにも少し明るくなった。

住居の次に欠かせないものとなる食事はほぼ外食だった。シンガポールの賃貸のコンドでは「調理不可」物件も多く、筆者の物件も電子レンジのみ使用可能だった。時々、電子レンジで温めるレトルト食品を食べることはあったが、ほとんどの食事は Boon Keng 駅前の Bendemer market にあるホーカー（Hawker）で食べていた（第 2 図 b）。時々、Downtown Line Geylang Bahru 駅前や Little India のホーカーや、Farrer Park 駅に直結する商業ビルのフードコートで食べていた。シンガポールへ観光旅行に行った経験のある方は「高い」という印象をもっているだろう。ホーカーは屋台とフードコートの中間的な飲食施設で、ホーカーでもどの観光ガイドブックでも紹介される Lau Pa Sat では、平均 7~8 シンガポールドルと、そこそこの価格である。ただ地元住民が日常的に利用するホーカーでは高くても 5 シンガポールドルで、1 食あたり 3~4 シンガポールドルだった。自炊と大差ない価格であり、地元住民が毎日毎食で利用しても破産することはない。なおこのホーカーでは、空缶の置かれた「簡易喫煙所」がいくつか“設け”られていた。その他にも歩道に等間隔で設置されたゴミ箱の上には「公式な灰皿」も備えられていた。「喫煙者に厳しい国」というイメージは渡航初日になくなった。昼食は大学内の食堂でとることが多かった。大学の食堂もホーカー形式で「Japanese」と掲げられたストールもあった（第 2 図 c）。ここで提供される味噌汁は湯に味噌をといただけのものであった。シンガポール滞在が 6 か月を超えるあたりに無性に日本食を食べたくなった。自宅近辺で探してみると、Bugis 駅近くにある Bugis Junction という商業ビルで日本（風）食を食べられた。もちろん高級店の集積する中心部の高島屋に行けば、正真正銘の日本食も食べられるが、なかなかの価格なので 1 回しか利用

しなかった。

またホーカー脇にはフードマーケット、スーパーが設置されており、水やビールなどの日用品を揃えられた。筆者がよく利用していたスーパーは Sheng Siong (昇菘超市) と Fair Price で前者の方がローカル色を感じられる。ホーカーやフードマーケットはおおよそ HDB のブロック毎に設置されており、行き当たりばったりで HDB を回っていけば見つけられる。地元住民の日常的な食生活はホーカーとスーパーで垣間見える。なお、ホーカーで食事していると地元住民から住民として話しかけられることがままあった。

2. 研究活動について

研究環境については、NUS 地理学部の短期留学やポスドク研究員が利用している部屋の 1 ブースを間借りした (第 2 図 d)。当初の予定では Honor visiting researcher を付与という段取りだったが、うやむやになったまま肩書きなしのまま気楽になんとなくこの部屋を利用することになった。インターネットへの接続については申請すれば NUS の回線も利用できたが、eduroam を不自由なくそのまま使えたのでとくに申請することもなかった。欧米では visitor の滞在でも高額な在籍料を要すると耳にしたこともあるが、NUS では無料で利用させてもらった。こうした環境を準備できたおかげで 2016~2017 年度の「ツケ」を返済できた。さらに英語圏の研究動向をまとめてレビューする時間をとれた。*Progress in Human Geography* を起点として文献渉猟にまとまった時間をもてたのは修士 1 年生時以来で、とても楽しい時間となった。

大学へは MRT の North East Line Harbourfront 駅で Circle Line に乗り換え Kent Ridge 駅で下車して学内バスという南回りか、路線バスを 2 本乗り継ぐ北回りで通った。帰りには Circle Line に乗らずに Harbourfront 駅まで 2 階建の路線バスに乗ることも時々あった。MRT も路線バスも「Ez-link card」という IC カードでシームレスに繋がっている。電車からバスに乗り換えても初乗り運賃は不要で、料金は 200 円もかからなかった。現金でも支払えるが、現金での支払っている者はわずかであった。なお、地元住民は 2 階にはあまり乗らず、混んでいても 1 階に留まる者が多い。筆者のお気に入りには 2 階の最前列で、地元住民が 1 階を好んでくれて座席争奪戦を回避できた。また電車・バスの車内では、自分より年上と目される人に躊躇なく席を譲っていたことは印象的であった。

3. 余暇

休日には自宅周りのジョギング&散歩だけの日もあれば、出かけることもあった。植物園や動物園、バードパーク、国立博物館、国立図書館、クラウド・フォレスト、セントーサ島、ウビン島、カジノなど様々なところを楽しんだ。その中でもハリラヤ・プアサと春節は印象的であった。正確にはハリラヤ・プアサは「祭りのあと」を見に行った。ハリラヤ・プアサはラマダーンを終えたお祝いで約 1 か月間続く。恥ずかしながら筆者はイスラム圏のハリラヤについて全く知らず、TV ニュースでハリラヤの終了と、インドネシアなどから屋台や移動式遊園地などを出店

a) ハリラヤ・アプサのあと（2018年6月）



b) 春節のマリーナベイ（2019年2月）



第3図 シンガポールでの余暇の様子
（筆者撮影）

していた者が帰国する様子を見て知った始末であった。翌日、慌ててニュースで放映されていたゲイラン・セライ地区に向かってみたものが第3図 a であった。終了後でも本番の盛り上がりを想像でき、見逃したことが悔やまれた。筆者の労働力移動に関する理解はとても狭いものであったことを実感した。

春節は大学だけでなく街の様々な施設が休むことから、本番に立ち会えた（第3図 b）。12月31日から1月1日にかけても花火などがあがるが春節の盛り上がりは比喩ものにならない。普段、観光客が大半を占めるマリーナエリアから Chinatown 一帯では、屋台の出店や巨大なパビリオンが設置され、歩くのも一苦勞な状況であった。シンガポール・フライヤーの真下あたりにある巨大な浮島の The Float @Marina Bay も余すことなく利用されていた。華人社会での旧正月である春節の重要性を実感した。

IV エクスカーションにおすすめのスポット・エリア

シンガポールにはエクスカーションに向いているスポット・エリアはいくつもある。先述の国立博物館やクラウド・フォレスト、ウビン島、セントーサ島なども地理学のおもしろさは備わっているが、多くの観光ガイドブックで紹介されている。ここでは日本語の観光ガイドであまりみかけないスポット・エリアを中心に紹介する。

1. Pasir Panjang Wholesale Center

一つ目は、Pasir Panjang Wholesale Center である。シンガポールにも当然、ローカルな生活を営むための施設は点在している。このマーケットはその一つだ（第4図 a）。Wholesale の名称の通り業者向けの販売が中心となっているが、個人客も日常的な食材を購入している。客層も欧米系から華人系、インド系など、まさに「るつぽ」である。

売られている食材は他民族国家であるシンガポールらしく、見慣れないものから、見慣れたも

a) マーケットの様子



b) 乾物エリア



c) Jaoanese Cucumber のケース



第4図 Pasir Panjang Wholesale Center
(筆者撮影 2018年12月)

の、「何これ?」というものまで様々だ(第4図 b)。とくに第4図 cには「Japanese Cucumber」, 「Produce in Malaysia」と記されている。これはマレーシア産の日本でよくみる“細いキュウリ”であり、日本から輸入されたものではない。その他にも Japanese Sweet Potato (いわゆるサツマイモ) など日本で品種改良された作物もみられる。マーケットで売られるものは、農産物であってもモノに限定されず、知財が商品となって流通していることの証左である。現代社会の経済活動で最も覇権を握るセクターはモノではない。モノに付随する「知識」もセットで捉えることで、農産物をめぐる経済地理学の新たな地平が開けるだろう。

立地は、MRT Circle Line の Haw Par Villa 駅から徒歩5分である。隣の Pasir Panjang 駅からだと30分弱歩くので要注意である。路線バスならマーケットの目の前にバス停がある。なお Haw Par Villa は観光ガイドブックで紹介され入場無料の庭園である。このマーケットは一般客にも開放されていること、様々な属性の人々が入り出しており訪問しやすい。もちろん卸売がメインのため、場内にはフォークリフトが行き来しており、20~30人単位で固まって移動は厳しい。場内に入る前に、みるべきポイントを説明して、5人以下の小グループで分散させれば、問題なく見学できる。また、隣接する West Coast Park はコンテナヤード、さらに西側に進むと、対岸にジュロン工業団地が見える。折り返しに早稲田渋谷シンガポール校の前を通れば、NUS のキャンパスの西端も近くキャンパス探訪も合わせられる。

なおニュースで Jurong Fishery Port をみて、現地に行ってみたが一般人は入れなかった。一般の個人客は近くにある Far Ocean Singapore で、シンガポールで流通する鮮魚を観察できるが、中心市街地やあちこちにあるフードマーケットでも観察できる。中高の教科書でおなじみのジュロン工業団地も許可車両以外は入れない。

2. Chinatown の「表」と「裏」

Chinatown はもはやシンガポールの定番の観光地である。とくに MRT Chinatown 駅の東側は「きれいに」改修されたショップハウス建築が並んでいる。ショップハウスはほぼ観光客向けの飲食店や土産物屋となっている。この様子は高校の教科書や資料集でも「過去」と「現在」を比較する写真を目にした読者も多いだろう。観光客にとって「表」となる Chinatown の光景であ

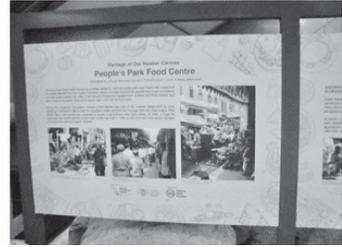
a) 「表」の様子



b) 「裏」の様子



c) People' park の説明の展示



第5図 Chinatown の「表」と「裏」

注：シンガポールでは「ホーカー文化」の文化財化をはかっている。

c) の案内文には「日本統治」の文言も含まれている。

(筆者撮影 2018 年 12 月)

る（第5図 a）。他方、駅西側の People's Complex や People's Park を中心とした複合商業施設群は生活感を醸しだし、観光客からみると Chinatown の「裏」にも映る（第5図 b, c）。利用者は地元住民や移民労働者、なかには欧米や日本からの駐在員と様々である。

People's Park の1階にあるホーカーの価格は、東側の「きれいに」改修されたショップハウスに入る飲食店に比べて格段に安い。「きれい」とはいえないが、中華料理をメインとしたローカルな食生活に触れられ、見て回るだけでもおもしろい。People's Complex は旅行代理店や海外送金サービス、マッサージ、アクセサリ、雑貨など雑多な業種の店舗が入居している。肩こりのひどい筆者は1か月に1度のペースでこのマッサージ店を利用していた。また旅行代理店で販売される旅行商品のディスプレイをみていると、当然のことながら国内旅行を紹介するように東南アジア各国への旅行商品がひしめいている。ここではあまり「日本行き」の商品はみられなかったが、シンガポールに住まう一般人がどのような観光行動をとっているのかが垣間見えるスポットであり、地元住民にとっては駅西側が Chinatown の「表」なのかもしれない。

3. Heritage Trails

Heritage Trails は和訳すると、文化遺産の散歩道のようなものである¹⁾。シンガポールでは The National Heritage Board が、多民族国家のシンガポールで共有されるストーリーやその背景を含めて国民を象徴するモニュメント、日常生活の空間、近所の遊び場などを一つの Trail としてつなげて顕彰するものである。シンガポールに住む者にとってルーツは様々であるが、シンガポールという国家の枠のなかでそれぞれのルーツがどのように混在したり、結びついたりするのかといった「読み取り方」を提示するものである。2023年5月現在、21のエリアがこの Heritage Trails に設定されている。The National Heritage Board のウェブサイトでは大まかな紹介にとどまるが、市中を歩いていると第6図のような案内板に出会す。こうした案内板は観光スポットでみつけることもあれば、地元住民が談笑している広場の脇にポツンとあったりする。こうしたこの案内板はウェブ検索だけで全て拾えないので、案内板をみつけてマッピングしていくことも、少し調査的要素を加えたエクスカージョンの題材にできるだろう。さらに、案内板の記述をみてい



第6図 Heritage Trails の案内板
(筆者撮影)

くことでシンガポールの「正統」な歴史を読み取れる。他方、脇で談笑する地元住民からは気にもとめられていなかったりする。「正統」なシンガポールとは何かを考えていくための起点になるだろう。自宅最寄りの Boon Keng 駅にも案内板を見つけれられたが、多くの住民にとっては流れていく景色の一つであった。

4. North East Line Senkang 駅と LRT

最後のエリアは「何の変哲もない住宅地」である。シンガポールの郊外では3つのエリアで MRT を補完する LRT が開通している。このうち筆者が訪問したのは North East Line Senkang 駅から発着する LRT だ。中心部の金融街へ通勤すると 60~90 分で通勤できる地域である。道行く人の雰囲気からも雑多すぎず、洗練されすぎずといった地域と感じさせてくれる。Senkang 駅にはショッピングモールが併設され人通りも多い。この駅を起点に2方向に走る LRT はゴムタイヤ車輪の1両編成の車両が無人走行するもので、ミニサイズのポートライナーや舎人ライナーというものである。LRT の沿線には高層の HDB が林立するが(第7図)、まだ更地も目立ち宅地開発の途上であり、郊外化の最前線を彷彿とさせる。日本の郊外住宅地と比較しながらみると、「何の変哲もない住宅地」は地理学的にももしろい住宅地に変わるだろう。帰りは路線バスで景観を眺めながら帰った。HDB しかないエリア、古くからの戸建て住宅が目立つエリア、



第7図 LRT Senkang Line
(筆者撮影 2019年2月)

ところどころにコンドといった土地利用の変化を、丘陵部をのろのろと走るバスから眺める時間はよそ者からすると充実したものであった。

V おわりに

本稿は、筆者のシンガポールで得られた雑駁な「現場の感覚」である。「もっと別のところ」を思い描く読者もいるだろう。その通りで2018年当時の筆者の経験値で読み取れたものである。異論がでることはむしろ充実した地理情報の共有につながり、本稿はその起点になればよい。今後、海外エクスカージョンも徐々に再開されるだろう。その際の情報提供になればよいと考えている。

また研究者にとっては、渡航準備に際した「失敗談」は反面教師になりうると考える。ツテを優先して学術ビザの有無を確認しなかったこと、研究費から支出可能なものを十分に確認しなかったこと、この他にも小さなミスは書ききれなかったし、すでに忘れてしまった反省点もたくさんある。記憶が濃いうちに書き留めておけばよかったが、これも後の祭りである。

日本帰国直後には「しばらく海外はいいや」、「シンガポールは一生分行った」などと思っていたが、拙稿を書きながら写真や地図を見返していると、「こんなこともできるな」、「あそこはどうなっているだろう」という思いが湧いてきた。IVで示したものには研究のアイデア的なものが含まれている。シンガポールを事例とした研究についてはこれからの課題である。もしくは他の研究者が拙稿から着想をえて取り組まれることを願う。シンガポールは観光商品としてパッケージされた印象の強い国であるが、地理学的な研究対象としてまだまだ「調理しがいのある素材」であろう。

付記

筆者のサバティカル研修の遂行にご協力いただいた全ての方に感謝申し上げます。とくにNUSの方々、非常勤講師を務めてくださった伊賀聖屋氏（名古屋大）、田中雅大氏（当時学振PD、現在東京大）、山口晋氏（目白大）、金沢大学学校教育学類社会科教育専修（当時）、人間社会環境研究科人文学専攻などの同僚教員、そして家族には筆舌につくしがたい御高配を賜りました。こうした随想を執筆する機会をくださった野間晴雄先生をはじめとした関西大学文学部地理学・地域環境学教室の皆様にお礼申し上げます。

注

1) National Heritage Board. Roots: Heritage Trails. (<https://www.roots.gov.sg/nhb/trails>) (2023年5月12日最終閲覧)

文献

太田 勇著、寄藤昂・熊谷圭知・堀江俊一・太田陽子編（1998）.『華人社会研究の視点－マレーシア・シンガポールの社会地理』古今書院.

銀塚賢太郎（2001）. 日本電機企業の東南アジア展開にともなうシンガポール地域オフィスの形成とその役割. 地理学評論, 74(4), 179-201.

銀塚賢太郎（1998）. シンガポールにおける産業構造の変化とオフィス空間. 人文地理, 50(4), 317-339.

- 庄子 元 (2019). 日本における水田経営の地域的特徴. 青森中央学院大学研究紀要 **30・31** 合併号, 29-42.
- 杉本興運 (2017). シンガポールにおける観光と MICE の発展. E-journal GEO, **12**(2), 246-260.
- 内藤嘉昭 (1995). シンガポールにおける人口構成と観光特性. 人文地理 **47**(5), 501-511.
- 中澤高志 (2012). 日本人現地採用労働市場の拡大とその背景—2000年代半ばのシンガポールの事例—. 地理科学 **67**(2), 153-171.
- 中澤高志・由井義通・神谷浩夫・木下礼子・武田祐子 (2008). 海外就職の経験と日本人としてのアイデンティティ—シンガポールで働く現地採用日本女性を対象に—. 地理学評論 **81**(3), 95-120.
- 山下清海 (1988). 『シンガポールの華人社会』大明堂.
- Cole, R and Rigg, J. (2019). Lao peasants on the move: Pathways of agrarian change in Laos. *The Austrarian Journal of Anthropology*, 30(2), 160-180.
- Gillen, J., Nguyen, T. A. and Rigg, J. (2019). Nice to meet you: Encountering introductions and departures in the field. *Area*, 51(4), 771-778.
- Nguyen, T. A., Gillen, J. and Rigg, J. (2020). Economic transition without agrarian transformation: the pivotal place of smallholder rice farming in Vietnam's modernization. *Journal of rural studies*, 71, 86-95
- Shoji, G., Yoshida, K., Yokoyama, S. and Thompson, E. (2020) Transition of Farmland Use in a Japanese Mountainside Settlement: An Analysis of the Residents' Career Histories. *Geographical Review of Japan series B*, 93(1), 15-26.
- Thompson, E., Rigg, J. and Gillen J. (2019). *Asian smallholders in Comparative perspective*. Amsterdam University Press.

An Essay on Daily Life in Singapore

YOSHIDA Kunimitsu*

This article is an essay that I wrote during my stay in Singapore while on sabbatical. Some of the “feelings in the field” that are shared as geographically interesting matters are interesting but difficult to cover in academic journals. Additionally, the secondary purpose was to introduce young people, who are considering sabbatical, to the author’s “failed experiences” while introducing candidate sites to readers, who are considering Singapore as a destination for overseas excursions.

Some of the “feelings in the field” included research ideas. Singapore’s impression is one of being packaged and promoted as a tourist destination; however, as a geographic research target, it still is a material worth researching.

Key words: Excursion, Sabbatical, Daily life, Hawker, Condos, Singapore

*Associate Professor, Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University E-mail : ysh-9232@ris.ac.jp